



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	第60期臨地研究要旨(fulltext)
Author(s)	
Citation	学芸地理(66): 70-75
Issue Date	2011-12-22
URL	http://hdl.handle.net/2309/125515
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

第60期 臨地研究要旨

2010年10月 福島県郡山市

郡山市における磐梯熱海温泉の観光客誘致の取り組み

A類社会・阿部 大地

温泉観光は日本の主要な観光産業の一つであるが、現在では全国的に観光客が減少し、観光客誘致に向けた取り組みが行われている。本研究では、福島県郡山市における磐梯熱海温泉を対象とし、郡山市（行政）、磐梯熱海温泉観光協会、各旅館の3つの主体に着目して、観光客の誘致に向けた取り組みを明らかにした。

磐梯熱海温泉の観光客は減少しており、その要因には、温泉地付近のバイパスの開通による通過車両数の減少、旅行形態の変化、不況の影響が挙げられる。3つの主体は、観光客を誘致するために、それぞれが様々な取り組みをしてきた。市は郡山市観光振興基本計画をもとに様々な観光事業を進め、とりわけ施設の整備や他の機関との連携に力を入れてきた。磐梯熱海温泉協会は、磐梯熱海温泉の観光に力を入れ、8月に行われる萩姫まつりなどのイベントや景観整備などの日常的な取り組みを行ってきた。各旅館は旅館として生き残るために、それぞれの特性を発揮した施設や経営によって観光客を呼び込んできた。近年、各主体間が相互に協力する新しい活動が行われている。具体的には、独自の温泉地図を作る、市と磐梯熱海温泉協会の若手の職員・全員同士の話し合いの場を設けるといった活動があげられる。こうした各主体間の連携は、地域が一体となって観光に取り組むという意味がある。

観光客誘致に向けて、立場が異なる3つの主体が連携することは、その土台を築くことになる。磐梯熱海温泉への観光客の誘致を図るため

には、この土台の上にそれぞれの取り組みを機能させることが求められる。

郡山市における米のブランド化と生産・流通への影響

A類社会・岡本 雅史

日本では、農業を活性化する手段として、各地で農作物のブランド化に取り組んでいる。本研究は、「あさか舞」を取り上げ、ブランド化が農業に与える影響や効果について考察した。その際、米の生産・流通に関わる生産者、集荷業者、店舗（小売業）、消費者、市役所を取り上げ、その主体や主体間の関係に着目した。「あさか舞」とは、郡山市で生産されるコシヒカリやひとめぼれの一等米につけられる名称である。

「米消費拡大推進協議会」は、郡山市の米の需要増加の推進を目的に結成され、市役所のほか、多くの組織で構成されている。市役所はこの協議会を通して「あさか舞」のPR活動をしてきた。それによって、消費者は郡山産の米を高く評価し、小売店では「あさか舞」が好評を得た。市のPR活動は、これまでの市内中心から、市外・県外での活動を実施し、販路の拡大をねらっている。

郡山市の米流通は、集荷業者数が多い点に特徴がある。このため、個々の集荷業者は、多数ある小売業者から納入先として選ばれる工夫が必要となる。ブランド化により「あさか舞」の販売額を増加させたことで、集荷業者は、小売業者から「あさか舞」の取扱いの有無や品質を求められるようになった。その背景には、「あ

さか舞」の存在が消費者に広く知られ、消費者の郡山産の米への信頼感や安心感を生み、米への評価を向上させたことが指摘できる。一方、郡山市における米の生産量・作付面積は減少傾向が続いている。以前からコシヒカリやひとめぼれを生産してきた生産者への聞き取り調査から、ブランド化が生産意欲の向上に結びつかないという声も挙がっており、ブランド化が米の生産量の増加に寄与しているわけではないことが考えられる。

郡山市における開成山野球場の利用形態と地域に果たす役割

A 類社会・小川 裕人

近年、プロスポーツの誘致やスポーツイベントによる「スポーツによるまちづくり」が広く行われている。本研究では、地元球団や大規模スポーツイベントのない郡山市の開成山野球場に着目し、その利用形態、球場と地域社会とのかかわりから、球場が地域社会に果たす役割を市役所や商工会議所への球場の利用状況に関する聞き取り調査から明らかにした。

開成山野球場は、老朽化によってプロ野球一軍の公式戦が開催されていない状態が続いていた。こうした問題の解決に向けて、市民や地元企業が設備改善を要望し、かねてより問題となっていた耐震性の不安を解決するため、郡山市によって2009年から大規模改修が行われた。これにより、グラウンドが国際規格化し、ベンチ裏も拡張され、プロ野球一軍公式戦の開催が可能な球場となり、スポーツを行う場、観る場としての充実が図られることとなった。

開成山野球場には、スポーツを行う・観る以外にも、次のような機能がある。①大量集客施設機能があり、人の流れが生まれ、地元企業はビジネスチャンスとして新たな商品・商売を試

すことが可能である。②行政・地元企業が多くの人に情報を伝達できる場として、広報・広告活動を行うなど情報発信機能を有している。球場改修に伴うスコアボードの電光化によってこの機能は強まった。③改修により、外観が桜をイメージした地域性のあるデザインとなり、地域のシンボルという新たな機能も生まれた。④周囲の開成山公園が広域防災拠点であるため、防災拠点機能が強化され、有事の安全確保に備えている。⑤会議室の利用や散歩での外野スタンドの通行も可能となり、市民にとって球場がより身近なものとなった。

以上のことから、地元球団や大規模スポーツイベントのない開成山野球場も、まちづくりにおける一定の役割を担っていることが明らかになった。

郡山市中央商店街の衰退傾向と活性化へ向けての取り組み

A 類社会・清沢 創一

高度経済成長期以降の郊外への人口流出やモータリゼーションの進展、近年のネットショッピングの広まりなどによる消費行動の変化は、中心商店街の衰退をもたらした。本研究では、福島県郡山市の郡山市中央商店街を取り上げ、商業活動の特徴と変化を明らかにし、さらに近年の活性化へ向けた取り組みとその影響や課題について考察することを目的とした。

中央商店街は近世以来、奥州街道の宿場町ならびに郡山市の中心として発展してきた。郡山市は、福島県内において年間商品販売額、事業所数、店舗面積からみて現在も小売業の中心地である。しかしながら、1997年以降年間商品販売額、事業所数はともに減少傾向にある。大型店舗の郊外への出店と中心市街地からの撤退など、全国的にみられる問題も発生している。

中央商店街では、近年、物品販売を中心とした小売店の減少や空き店舗の増加、通行量の減少などが起こっている。

こうした状況に対し、中央商店街では1998年以降、道路の高質化事業や、核店舗である老舗百貨店の店舗統合・建て替え工事といった施設・設備面の改良・充実や、古くからの伝統的行事の要素を取り入れた各種イベントの実施などの活性化事業を実施してきた。景観整備がなされた中央通りや、イベント時の来街者の増加、イベントを介して商店主相互の親交を深めるなどの新たな変化がみられた。しかし、それらの取り組みが各商店の売り上げ増加にはつながっておらず、通行量も依然として増加には転じていない。こうした状況から近年は、さらに他の商店街を含めた合同イベントが開催されるなど、中心市街地全体としての魅力発信に重点が置かれている。

以上のことから、今後は日常的な通行量を増加させ、それを具体的な売り上げへとつなげていくことが活性化へ向けての課題である。

福島県三春町における観光による地域振興の展開

A類社会・島田 雄仁

日本の中山間地域では、都市部への人口流出による過疎化や高齢化、地域コミュニティの崩壊が問題視され、さまざまな形で地域活性化の取り組みが行われている。本研究では、福島県三春町を研究対象地域とし、観光地化の進展と観光による地域活性化の取り組みを考察した。

三春町では、かつて養蚕や葉タバコを中心とする第一次産業が主であった。しかし、価格競争や貿易の自由化によって1970年代以降衰退し、地域活性化に向けた新たな取り組みが求められ、1998年、三春ダム建設による観光地化

がめざされた。観光施設の建設が進むとともに、周辺の環境整備・景観整備も進行し、三春町は以下のように変化した。

三春ダム周辺と町役場付近の中心市街地には観光施設を中心とする地域活性化の拠点がつくられた。三春ダム周辺では、三春滝桜や三春の里田園生活館をはじめとする観光施設が開設され、地域住民によるブルーベリー観光農園など自然・農業をテーマとした観光拠点が展開している。滝桜は4月中旬から下旬にかけて毎年約30万人の観光客を呼び込む一方、高速道路や周辺道路の渋滞の原因となっている。田園生活館では、野菜の直売所を設け三春町の農家と地域住民をつなぐとともに、スポーツ合宿や企業研修など教育施設としての役割を果たしている。観光農園は地域の遊休農地解消にも寄与している。中心市街地では、城下町三春の歴史を活かした景観整備が行われた。福島県や三春町などの行政によって電線の地中化や石畳舗装道路化が実施されたり、地域住民と連携し、景観条例に従った住居建設を呼びかけたりと景観に配慮したまちづくりが1980年代中頃から進められた。また、中心市街地へ多くの観光客を呼び込むために、地域住民が主導して観光ボランティアを結成し、観光案内を行っている。

三春町では、まず行政主導の公共投資によって観光地化が進められたが、地域住民も観光事業に関与あるいは協力するなかで地域活性化に参加しつつある。今後、行政と地域住民が連携し、地域資源をいかした持続可能な観光地として発展していくことが期待される。

福島県田村地域における「菜の花プロジェクト」とその課題

A類社会・菅原 匠

現在、日本全国で耕作放棄地の増加が問題と

なっている。耕作放棄地の増加が引き起こす問題についてはさまざまな指摘がなされているが、具体的な対策事業を分析した研究は少ない。そこで本研究では、福島県田村地域の耕作放棄地対策事業である「菜の花プロジェクト」を取り上げ、その具体的な実施状況をもとに、課題を明らかにした。

田村地域では、かつて産業の基盤であった工芸作物や養蚕業の衰退によって多くの農地で耕作が放棄され、福島県の中でも耕作放棄地化の深刻な問題に直面している。「菜の花プロジェクト」は田村地域の耕作放棄地化に歯止めをかけるため、県からの要請で成立した対策事業である。本プロジェクトではJA主導のもとで、耕作放棄地に菜の花を植えることにより耕作放棄地の解消や景観の保全、菜種油の商品化が行われている。また、地域住民参加型の普及活動として菜の花フォトコンテストや絵画コンクールが行われ、地域ぐるみでプロジェクトを実行していこうとする姿勢が見られる。

本プロジェクトは耕作放棄地の減少にある程度の成果を収めている反面、課題もある。プロジェクトの実施にあたり県からJAに補助金が交付されているが、その支出には制約が多い。また、栽培した菜の花から採れる菜種油については、民間の企業に搾油を委託しているために価格が割高になり、販売量が少なく利益が少ない。さらに、こうした事情を反映して、農家の参加意識も高いとはいえない。

以上のように、菜の花プロジェクトを存続させていくためには改善すべき点が数多くある。その改善には、各農家やJAによる取り組みだけでは限界があり、行政による補助活動の緩和や支援政策を確立することが必要な段階にある。

郡山市中田町における柳橋歌舞伎の継承形態

A類社会・蛸井 星峰

現代の日本社会における文化・教育政策の中で伝統文化が重視され、民俗芸能の継承・保存の機運が高まりつつある。しかしながら、民俗芸能の継承地域の多くは過疎化や少子高齢化による担い手の減少から、民俗芸能が衰退・消滅するという問題を抱えている。郡山市中田町は人口減少や少子高齢化が進んでいる地域であるが、民俗芸能が現在も継承され続けている。そこで本研究では、郡山市中田町の柳橋歌舞伎を事例とし、民俗芸能の継承形態を明らかにすることを目的とした。

中田町では、地域住民が旅芸人の歌舞伎を真似たことで歌舞伎が始まり、やがて地区内の各集落に広まった。明治期に興行の取り締まりが厳しくなると、地区内で1つにまとまって神社へ奉納する形態となった。1965年頃から、柳橋公民館で公演が実施され、1983年には郡山市の重要無形民俗文化財に指定された。大正時代中期のほか、1972～1980年の間には、公演は中断したが、地域住民の復活を望む声を受け、地区内の有志が保存組織を設立し、公演が復活した。

現在の柳橋歌舞伎の活動には、柳橋歌舞伎保存会による定期公演、郡山市立御館中学校での歌舞伎学習、柳橋町内会主体の「柳橋歌舞伎PRプロジェクト」などがある。市の重要無形民俗文化財に指定されたことや御館中学校の生徒が学習成果を発表するようになったことで、定期公演の観客も増加した。また、多くの観客に歌舞伎をわかりやすく理解し、楽しんでもらうため、演目開始前に地域住民によって紙芝居での内容説明が行われている。御館中学校の歌舞伎学習は、新たな担い手の育成や技術継承の場ともなっている。実際に中学卒業後、定期公演を手伝う人も出始めた。「柳橋歌舞伎PRプ

プロジェクト」は、町内会と福島県内の大学生や御館中学校の生徒などと有名漫画家が柳橋歌舞伎をモデルに描いた原画をもとに懸垂幕を作成し、地元商店のシャッターなどに掲げている取り組みである。福島県内のメディアにたびたび取り上げられたことで柳橋歌舞伎は認知度を高め、大学生が歌舞伎に関わるきっかけともなった。

以上、中田町の柳橋歌舞伎は、地区の外に向けた発信が民俗芸能の継承に繋がっている。ただし、柳橋地区の人口減少や少子高齢化は今後も続くと予想され、柳橋歌舞伎の継承にとっては新たな担い手の創出や育成が重要な課題となっている。

郡山市におけるため池の機能にみる地域的特徴

A類社会・村上 格

近年、ため池の多面的機能への関心が高まっている。ため池に関する従来の研究は西南日本を中心としたものであったが、東北地方では西南日本のため池とは歴史的背景の異なるため池が分布していることが知られている。そこで、本研究では、郡山市のうち、阿武隈川以西の山麓部から平野部一帯を対象とし、ため池の分布と多面的機能を調査し、その地域的特徴を明らかにすることを目的とした。なお、機能分類については内田(2001)を参考にした。

郡山市は乏水性の台地が卓越し、古くから用水の確保をため池に依存してきた。そして、安積疎水の完成によって水利が改善されると、水田地帯が形成された。現在、対象地域のため池は、都市域に面積の大きなため池が点在する一方、山麓部では小さいため池が多数分布している。また、ため池の多くは水路を通して安積疎水と接続している。

利水機能のうち、現在みられないものとして、

江戸時代に存在した上水利用が挙げられる。一方、農業用水としての利用は、多くのため池で少ないながらも継続されている。ただし、現在の農業用水の中心は、安積疎水が担っている。そのほか、郡山市のため池では、養鯉業が展開されている。養鯉業の条件としては、安積疎水からの水の流入によってため池の水が涸れないことが重要である。養殖鯉は地域ブランドに認定され、養鯉業は地域に根付いた産業となっている。利水以外の機能では、まず、親水機能が確認できた。都市部では、ため池の農業利用がなされている一方で、公園に取り入れられ、人々の憩いの場として機能している。また、ため池は白鳥の飛来地として生態系の保全にも寄与し、地元のパンフレットでも紹介されていた。なお、レクリエーション機能は、釣りが行われるため池が1事例確認できたにとどまった。また、洪水調整機能は、都市部の2か所のため池に洪水調整設備を確認できた。

以上、郡山市におけるため池およびその多面的機能には、安積疎水との深いつながりや、都市化の中で存続されているため池の農業利用などの郡山市の地域的特徴が反映されている。

郡山市石筵盆地における冷気湖形成と斜面温暖帯

B類社会・古川 武尊

本研究では、郡山市北部の石筵盆地内の緩斜面の接地逆転の強度や継続時間に基づいて、盆地内に出現する冷気湖および斜面温暖帯の出現プロセスを把握した。高度50m間隔で斜面上に観測地点を設け、地上0.75mおよび1.8mに自記サーミスタ記録計を設置し、2010年11月6日から13日の一週間、10分間隔で気温を観測した。そのうち、東北地方が移動性高気圧に覆われ、晴天静穏日となった11月6日夕方

から9日早朝にかけての三夜を解析対象とした。また、観測地域を包括するアメダス（郡山、猪苗代、二本松）の気温と風向風速のデータ、および地上天気図（09JST）も参照した。

観測地で形成された冷気湖の上部は、斜面温暖帯出現高度である斜面中上部付近にある。そのため、観測地の斜面最上部は冷気湖には包括されなかった。また、冷気湖の上部と下部の温度差は3℃から4℃であった。一方、斜面の下部から上部にかけての平均気温は、21:00から23:00にかけてと、3:00頃の2回、観測斜面の中上部を中心とした昇温が認められ、斜面温暖帯が出現した。また、観測期間中、冷気湖の出現および発達には斜面温暖帯内部の温度の低下に伴って起こっていたため、冷気湖発達のピークの出現は斜面温暖帯のピークよりやや遅れる傾向にあった。

8日夜から9日早朝にかけては斜面広範において気温低下が小さく斜面温暖帯が不明瞭であった。これは東進してきた日本海の低気圧に起因する雲量の増大によって、放射冷却が抑制されたためと考えられる。このとき、冷気湖内部の気温は全体的に高く、1:00頃で降温が止まった。

解析対象となる期間において、周辺アメダスの気温の時間変化は緩やかに低下したが、観測地の斜面上では冷気湖や斜面温暖帯の形成に伴って、周辺3アメダスと異なる気温変化を示した。ただし、放射冷却が抑制された8日夜から9日早朝にかけては斜面上においてはアメダスの気温の時間変化と似た傾向を示した。他方、朝方の温度上昇に伴う冷気湖の解消は、斜面中部から開始したが、斜面下部でも昇温が起り、全体的な昇温に至ると考えられる。